

フクシマと幾度も呼びかけらるる歌流れてわれは浅く戸惑う 駒田晶子

震災以後、しばしば「励ます」とか「元気を与える」（「与える」は失礼な言い方だ）とか、それぞれの言い方で被災地を引き合いに出す人がたくさんいる。被災地の名を歌詞にうたい込んだ歌もかなりあったらしい。それらに対する違和感。福島で生まれ育った作者ならではの感慨ながら、「浅く」に独特の気づかひを読んでいるだろう。

一指づつはづしやる時気付きたりスプーンを握る母の頑張り 勝山多見子

「東京歌会」で高点を得た。「一指づつはづしやる」「スプーン握る」等、読者にイメージを喚起する具体的かつ的確な表現に対して多くの賛辞を受けていた。また、「気付きたり」「頑張り」が表現としていかが、という疑問も出ていた。

ふつうは「一指づつはづしやるなり……」または「一指づつはづしやる指」と二句切れにするだろう。そこをあえて、「……はづしやる時気付きたり」と三句切れにした。つまり「時気付きたり」がこの一首の修辭上のポイントとなっている。「気付きたり」がこの作の作品的個性の根底と読む。

確固たる母たらむとし乗せぬたるこの貌をいま冬陽に晒す 金美苑

何に乗せていたのか。首に乗せていたのだらう。子が眠ってしまったのか、遊びに行ってしまった後、母であ

短歌の現在

No.381 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

ることから解放されたところだ。取材感覚がいい。ただ、「冬陽に晒す」は不可。惜しい一首。

君は行き我は変わらずここに在るブラットフォームを違えたように 佐佐木定綱

さらっとした別れの歌で、別れの原因に対する認識がクールな点が持ち味。男女の別れとも、友人との別れとも読める。

泣きながら自分の頭を叩く子よ 拳にちひさき嵐にぎりて 山口明子

教員の立場で教え子に取材した作。他者に向ける暴力には対処の方法もあるが、自分に向かう場合は対処しにくい。下句、そのあたりの気分をうまく表現している。「小さき嵐にぎりて」は分かるような気がする。

元旦にドクターヘリに処置をする次男の姿ネットに見たり 長嶺元久

先日、牧水賞受賞式で宮崎に行った。懇親パーティーの後の二次会で、作者ご夫妻とたまたまこの次男の方を話題に話をした。たぶん、親として眩しい感じで元日の映像を見たのだろう。

濾すの字は思ひを抱ふ釉薬を篩にて濾す力をこめて 経塚朋子

素焼きの陶器にかけるために釉薬を調製している場面。網目の大きさがう篩で濾しているのだらう。面白い場面に取材している。ただ、冒頭近くに「字」をもってきたためあって、「字」が強くひびきすぎ、せつか